

Ⅲ 第54回栃木県家畜保健衛生業績発表会演題

1 管内のオーエスキー病清浄化への取り組みの成果と課題

県央家畜保健衛生所

市川智也、湯澤裕史、宇佐美佳秀

県北家畜保健衛生所

岡崎克美

はじめに

オーエスキー病（AD）清浄化対策については、平成20年に防疫対策要領が抜本的に改正され、取り組みが強化されたが、現在も当県を含む関東地方を中心とした12都県は未だ浸潤地域であり、清浄化対策を継続中である。平成20年度以降当所が実施してきたAD清浄化対策で得られた成果と、その過程から見えてきた課題について報告する。

材料及び方法

1 AD抗体検査

「栃木県豚オーエスキー病防疫対策実施要領」（実施要領）に基づき、管内養豚農家を対象としたモニタリング検査として、抗体検査を実施した。検査材料は豚血清とし、平成20年4月から平成24年10月までに延べ9,206頭を用いた。抗体検査は、ワクチン接種豚ではIDEXX社製のAD(S)ELISA及びAD(gI)ELISAを用いた。ワクチン未接種豚では科学飼料研究所製のキットによるラテックス凝集反応を実施し、この検査で陽性又は疑陽性となった検体についてはAD(gI)ELISAを実施した。併せて、飼養衛生管理状況の聞き取りと衛生管理指導を実施した。

2 AD防疫対策意識調査

調査対象は、清浄化を達成した管内北西部に位置する2市17農場、調査方法は、農場巡

回時または電話による聞き取りとし、以下5項目について調査した。

- 農場内へのADウイルス侵入歴
- ADワクチン接種歴
- ADワクチン接種中止を決めた理由
- 清浄化地域としてどんな対策を取っているか
- 繁殖豚の導入状況、専用の隔離豚舎所有率

結果

1 AD抗体検査

抗体検査では354頭のAD野外ウイルス抗体陽性豚が摘発された。事業開始当初は、全農場86戸中、AD陽性農場は12戸(14.0%)であった。平成24年11月時点では全農場68

表1 検査結果（陽性農場別）

農場No.	市町	H20	H21	H22	H23	H24.10月
1	A市	△	△	△	△	△
2	B町	△	△	○	○	○
3		△	△	○	○	○
4	C市	△	△	△	△	△
5		△	△	△	△	○
6		△	○	○	○	○
7		△	○	○	△	△
8	D町	○	△	△	○	○
9	E市	○	△	△	△	△
10	F市	×	×	×	×	△
11		×	△	△	△	△
12		×	△	△	△	△
13		△	△	△	△	△
14		×	○	○	○	○

×・・・繁殖豚、肥育豚共に陽性
 △・・・繁殖豚陽性、肥育豚陰性
 ○・・・繁殖豚、肥育豚共に陰性

戸中、陽性農場 8 戸 (11.8%) となり、着実に清
また、陽性農場のうち 3 戸は、今年度中に
清浄性確認検査を終了し、清浄化が達成でき
る見込みである。しかし、残りの 5 戸では、
ワクチン全頭接種により本病の発症は抑えら
れているが、全頭検査に難色を示す農場の存
在や陽性頭数が多く早期の淘汰は困難である
など、清浄化にはさらなる時間が必要と思わ
れる。

また、実施要領に基づく AD 清浄ステータ
ス区分における清浄段階(ステータスⅣ)の地
域は、事業開始時には 29 地域中 3 地域
(10.3%) であったが、平成 24 年 10 月には 32
地域中 11 地域 (34.4%) にまで増加した。

(図 1、2)

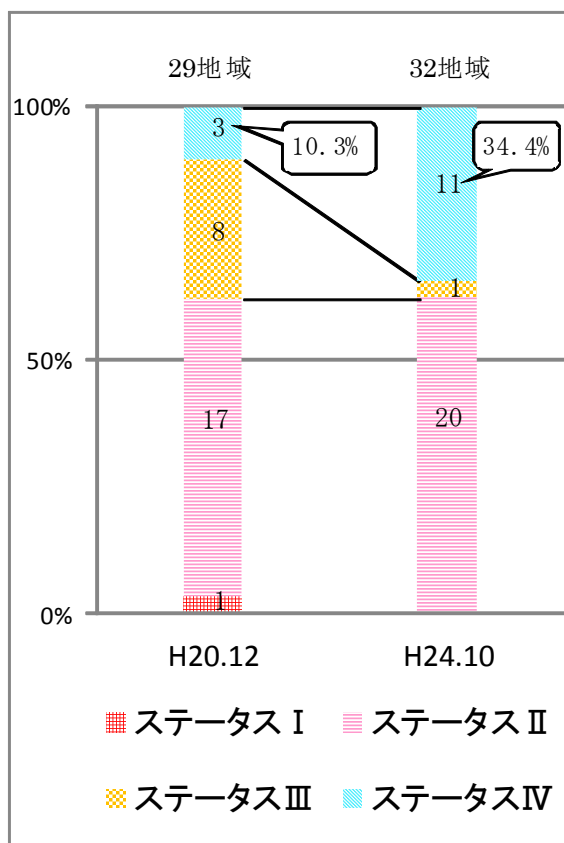


図 1 清浄性区分(ステータス)の状況

浄化へ向かっていると認められた。(表 1)

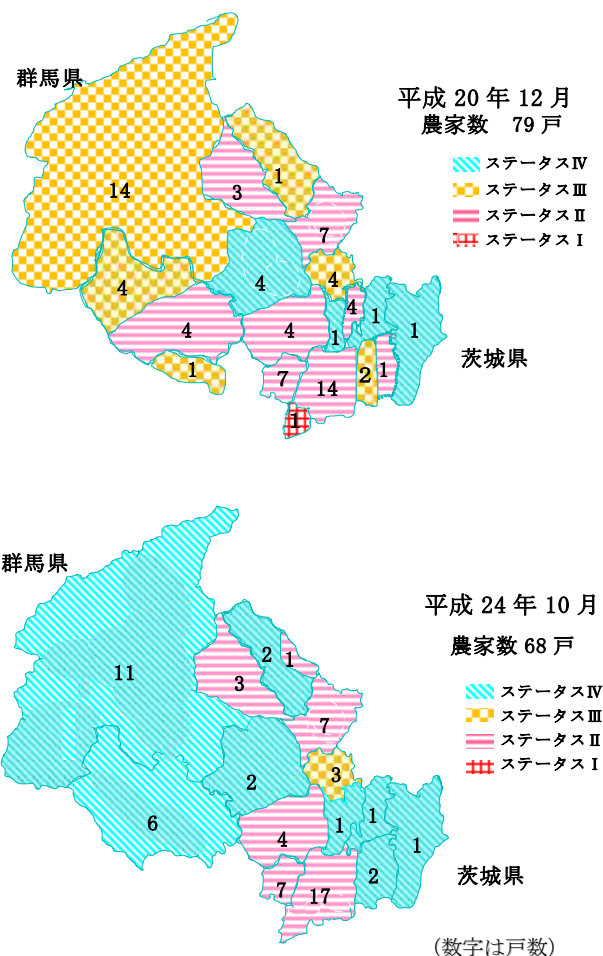


図 2 地域別の清浄性区分(ステータス)の状況

特に北西部の 2 市では、平成 23 年度まで
に全農場で清浄性確認検査を実施し、ワクチ
ン接種が中止され、地域全体で清浄化を達
成・維持している。

2 AD 防疫対策意識調査

清浄化達成した 2 つの市を対象に、清浄化
が達成された要因を探るため AD の防疫対策
への意識調査を実施することとした。

農場内の AD ウイルスの進入経験について
は、「あり」が 17 戸中 3 戸、AD ワクチン接種
歴については、6 戸が「あり」であった。(表

2、3)

表2 農場内へのADウイルス侵入経験

侵入経験	回答数(戸)	割合%
あり	3	18
なし	14	82

表3 ADワクチン接種歴

接種歴	回答数(戸)	割合%
あり	6	35
なし	11	65

次にワクチン接種歴のある6戸の農場に対して、清浄化されるにあたりワクチン接種を中止することができた理由を尋ねたところ、「陽性豚がいなくなったから」、「近隣農場と歩調を合わせるため」、「周辺で陽性豚が出ていない」、「家畜保健衛生所の指導があったから」といった回答であった。(表4)

表4 ワクチン接種中止を決めた理由

中止を決めた理由	回答数(戸)
自農場で陽性豚がいなくなった	2
近隣農場と歩調を合わせる	2
近隣農場で陽性豚がない	1
家畜保健衛生所の指導による	1

また、清浄化地域として何か意識していることはないかという質問に対しては、「一般的な衛生管理をしているだけで特になし」が16戸、「衛生管理の一部を変更した」が1戸で、

その内容は「繁殖豚を自家育成に切り替えた」という回答であった。(表5)

表5 清浄化地域としてどのような対策を取っているか

取っている対策	回答数(戸)
日常的な衛生管理で対応	16
飼養衛生管理方法一部を変更した	1

次に繁殖豚の導入状況、隔離豚舎所有率について聞き取りを実施したところ、17戸中10戸、59%の農場で繁殖豚を自家育成しており、隔離豚舎については7戸、41%の農場で「あり」という回答でした。これは管内他地域の自家育成率が10%、隔離豚舎設置率22%と比較すると高い割合であった。(表6、7、8)

表6 繁殖豚の導入状況

繁殖豚の導入状況	回答数(戸)	割合%
自家育成	10	59
導入	7	41

表7 専用の隔離豚舎所有率

隔離豚舎所有率	回答数(戸)	割合%
あり	7	41
なし	10	59

表 8 管内他地域の状況

(農家戸数 51 戸)

管内他地域	戸数	割合%
繁殖豚の自家育成	4	10
隔離豚舎所有	11	22

考 察

AD 清浄化が達成された調査地域では、リーダー的な農家を中心に定期的な会合が実施されており、農家間同士の繋がりが強く、情報交換が密に行われていた。また、家保の巡回検査に関係機関の協力が得られたため、各農場の衛生状況が的確に把握されていた。これにより、近隣での AD の浸潤状況が共有化されていたことが、ワクチン接種を中止するか否かの判断の材料となったものと考えられる。

また、繁殖豚の自家育成率、隔離豚舎所有率が高く、導入豚を介したウイルスの持ち込みリスクが管内の他地域と比較して低いと考えられ、これが現在も清浄性が維持されている一つの要因と考えられる。

一方、管内の清浄化が達成されていない地域では、「陽性豚はいるがワクチン接種を行っているので陽性豚を摘発、とう汰したくない」、「陽性豚はいないが念のためワクチン接種を継続したい」、「導入元が陽性農場であるが契約上変更したくない」、「豚へのストレスになるので採血に抵抗感がある」等、AD の防疫対策に対する意識にばらつきがあり、清浄化への意思統一が困難な状況である。

今後の取組

当所では、ワクチン接種農家、開業獣医師等を招集して AD 協議会を毎年実施しているが、出席率が悪く、情報交換の場としての機

能を十分果たせていないのが現状である。その原因の一つとして、管内の養豚農家は個人経営が多く、同一日に一カ所に集まることが難しいのではないかと考えている。そこで今後当所では、AD 協議会を各市町において、地域単位で開催することで、情報の共有化等による AD 清浄化対策の強化を図りたいと考えている。

また、いずれは家畜保健衛生所の仲介が無くとも、自主的に情報交換がなされるように、地域を取りまとめるリーダーとなる農家の育成も必要と考えている。

清浄化を達成するためには、個々の農場だけではなく、地域が一丸となって取り組むことが必要であり、防疫対策に高い意識も持つよう指導を継続、強化していきたい。